『シブヤで目覚めて』を読んで

21世紀の〈二都物語〉

阿部賢一

英国の作家チャールズ・ディケンズがロンドンとパリを舞台にした小説『二都物語』を発表したのは１８５９年。それから百六十年ほどを経て、新たな〈二都物語〉が誕生した。チェコの作家アンナ・ツィマによる『シブヤで目覚めて』は、日本文学に関心を寄せるプラハの大学生ヤナと、渋谷から離れられないもう一人のヤナの物語だ。外国文学の愉しみのひとつに異国の生活風景を味わえることがあるとしたら、この小説でも、ヤナの生活風景を通して、プラハの若者の生態（三船敏郎のファンとか、いつもビールを飲んでいるとか）を知ることができる。それに加え、彼女の視線を通した「東京」のイメージを垣間見ることもできるのも〈二都物語〉の醍醐味だ。とはいえ、異国情緒のみが強調される多くの作品と本書が大きく異なっているのは、ヤナが架空の作家川下清丸の小説をチェコ語に翻訳する点にある。しかも、大正・昭和初期の作家であるため、エキゾチックであるはずの文章からはどこかレトロな匂いが漂ってくる。プラハと東京という都市文化だけではなく、大正・昭和と21世紀という二つの異なる時代を駆けめぐるこの物語をいちばん楽しめるのは、日本の読者かもしれない。近くて遠い、遠くて近い都市の姿をもっとも体感できるからだ。ぜひ、この小説を繙いて、異なる都市と時間を往還する物語を満喫してほしい。

（あべ　けんいち・東京大学准教授）

再会

須藤輝彦

ここだけの話、僕とこの小説の著者、アンナ・ツィマは友だちだ。これは翻訳を通じて訳者と著者が友だちになったという、よくあるけれども胡散臭い話ではない。『シブヤで目覚めて』が出版され、瞬く間にチェコの新人賞を総ナメにするかなり前から、僕は彼女と友だちだった。しかも僕がプラハで出会った彼女は小説家ですらなく、日本文学を研究するチェコ人学生だった。こんなことを訳者が半ば公の場で言うのはどうかと思われるかもしれないが、このことは僕がこの小説を翻訳するうえで、かなり大きな要素だった。

『シブヤで目覚めて』は、二人のヤナを主人公とした物語である。プラハのヤナはとある（架空の）日本人小説家を研究・翻訳するのだが、渋谷に閉じ込められたヤナは、じつは現在進行形で小説を書いている。主人公と著者を同一視するのは文学研究ではご法度だけれど、アンナとヤナを重ねるならば、小説家であると同時に翻訳者・研究者でもある著者はここで、その二つの顔をそれぞれのヤナに割り当てている、と言ってもいい。だからだろう。小説を訳しながら、こんな思いが沸いた。ああ、5年前、僕がプラハで出会ったのは、アンナの片割れに過ぎなかったのだなと。

日本の読者がこの小説を読むとき、慣れ親しんだ母国であるはずの日本は、新鮮で、ちょっぴり奇妙な横顔を見せてくれる。この贅沢な経験は、僕にとってはアンナ・ツィマとの出会い直しとともにやってきた。

（すどう　てるひこ・東京大学大学院生）

異世界へ誘う〈日本小説〉

ブルナ・ルカーシュ

19世紀後半から台頭し、西洋近代美術の一大特色をなしたジャポニズムは、絵画やポスターといった視覚芸術のみではなく、同時代の文学にも鮮明に表れ、日本趣味を具象した文学作品、ことに小説も多数ある。興味深いことに、チェコには昔からこの種の作品が多く書かれ、国民に愛読されていた。来日経験はないが、東洋に魅惑され、日本を描いた小説を何篇も残した作家J・ゼイエルには、歌舞伎などでよく知られる白井権八と小紫の物語を独自に作り変

えた『ゴンパチとコムラサキ』という小説があるが、これはかの有名なピエール・ロティの『お菊さん』より数年も早く発表されている。ツーリズムという概念はもちろんなく、自由に旅行もできなかったこの時代に、小説は読者に異国への扉をひらくものであった。チェコをはじめ西洋で〈日本小説〉が流行したのはそのためでもあろう。

20世紀前半、日本を訪れるチェコ出身の旅行家や小説家が増え、日本を舞台にした小説も人気をあつめたが、戦後まもなく姿を消した。共産主義の強権体制に転じたチェコでは、海外旅行はほとんどの人にとって夢物語であったが、テレビやラジオ、新聞雑誌で外国の事情が取り上げられることが増え、遠く離れた日本もいつの間にか幻想の衣をはぎ取られ、現実として認識されるようになった。

アンナ・ツィマの『シブヤで目覚めて』はこのような伝統を引くとも言えようが、共通点よりむしろ違いが際立つ。従来の〈日本小説〉は異国としての日本の文化の紹介に力を入れ、物語そのものは二の次にされることが多かったが、ツィマさんの作品は、奇抜な物語展開に作者の主眼があったように思う。ヤング・アダルト小説という側面を持つ『シブヤで目覚めて』は、ここ20年ほどチェコで盛んに受容されるアニメや漫画に親しんできた若い読者層に絶大な人気を博したというが、その理由のひとつは、やはりストーリーの面白さにあるに違いない。そしてもうひとつ、ここで映し出される日本（または日本文化や文学）は、若く、思ったこと感じたことを遠慮会釈なくズバッと言ってしまう若い女性の目に映る日本であり、その描写は始終、誇張やアイロニー、そして何よりユーモアによって貫かれている。これもまた本作品の最大の特徴であり、最大の魅力でもある。

（ブルナ　ルカーシュ・実践女子大学准教授）